

シンポジウム：在住外国人の医療政策の構築に向けて～医療通訳システムの課題と展望  
Designing a patient safety system for patients with limited Japanese proficiency through medical interpreting services

西村明夫（多文化医療サービス研究会）

NISHIMURA Akio (Researching and Supporting Multi-cultural Healthcare Services)

## 概要説明

### Introduction and Overview

近年、在住外国人の増加や高齢化を背景に、在住外国人の妊娠・出産・小児疾患や生活習慣病などが顕在化してきている。在住外国人の医療は、制度上、公的医療保険の加入義務や医師法の応召義務など基本的に日本人と差が無い（ただし非正規滞在の場合は公的医療保険の加入が困難）。しかし、制度運用面においては、言葉の壁、文化・医療実践スタイルの違い、医療機関側の消極的な受入姿勢など乗り越えるべき課題がある。特に言葉の壁は、患者との会話によって愁訴や病歴の詳細把握、オーダーする検査の絞り込みなどを行うため、診療面で大きな影響を与える。

適正な医療を行うには、言葉の壁の解消は不可欠である。その手段として医療通訳は非常に有効であり、すでに自治体や国際交流協会、NPOなどによって医療通訳システムが構築されている。しかし、医療通訳には通訳技術と現場対応力、保健医療の知識、ソーシャルワーカー的な態度などが求められる一方、根拠となる法的位置づけが無く、通訳人材の育成・確保やシステム運営の財源（公的医療保険の対象外）、医療機関側の姿勢など乗り越えるのが容易ではない壁が立ちはだかっている。

そこで、本シンポジウムでは、最初に在住外国人患者が受ける医療の課題を明らかにし、次に、そうした課題を解決する手段の一つである医療通訳について、医療通訳派遣システムの事例を検討し、持続可能な制度設計の難しさを浮き彫りにするとともに、システム運営の原動力である通訳人材に注目してその役割と活動動機を明らかにする。また、海外の先進的な医療通訳システムの事例を検討し、日本との比較を試みる。さらに、国レベルでの初の本格的取組である厚生労働省の医療通訳事業の報告を受け、今後の課題解決の糸口と政策展開の方向を探る。